

# 4年に1度の 世界大会 文化部門 に注目!



4年に1度の世界大会が2年後に迫っている。「スポーツの祭典」という表現をよく耳にするが、スポーツだけではなく、芸術文化の振興も同時に推進されているのをご存知だろうか。  
今回は、4年に1度の世界大会の文化部門について紹介する。

## 芸術競技

古の時代から、近代に蘇ったスポーツの祭典は、1896（明治29）年アテネ大会から始まった。創立者はフランスの教育者、ピエール・ド・クーベルタン男爵である。暫くは、万国博覧会に合わせで開催されるスポーツイベントといったもので、文化的要素はなかった。

1912（明治45・大正元）年ストックホルム大会から、クーベルタン男爵の強い要望により、文化部門が動き出した。スポーツと同じく順位をつけ、メダルが与えられる「芸術競技」である。スポーツを題材とした建築、彫刻、絵画、文学音楽の5部門からなり、各国から選出された様々な作品でメダルを競うこととなった。

## ロサンゼルス大会

日本が初めて芸術競技に参加したのは、1932（昭和7）年ロサンゼルス大会である。国際的な交流の場で日本の美術や文化の素晴らしさを世の中に示すことが目的であった。全国から日本画、西洋

画、版画、木彫、建築設計図など300余りの作品が集まった。審査の結果47点の参加が決まり、事前に東京朝日新聞社の画廊で公開されたが、周囲の評価は芳しくなかった。スポーツの持つスピード感や古代ギリシャの彫刻のような作品を期待した人々にとっては物足りなかったようである。

本番では、版画家・長永治良氏の『蟲相撲』という作品が、事実上4位の褒賞を獲得する。「2人の少年が、相撲をとるカブトムシとクワガタを見ている」という構図が、スポーツとは少し違う印象を受ける作品であった。関係者にとって長永氏の受賞は意外な結果となり、国内でも大きな反響は得られなかった。

## ベルリン大会

1936（昭和11）年ベルリン大会では、日本の作品が銅メダルを獲得する。ベルリンの芸術競技は、参加国ごとに部屋が振り分けられ、作品が展示されていた。1つのスペースを分割するなどして展示する国が多い中、主要参加国のドイツ、イタリア、オランダ、オーストリアと並んで、日本にも大きなスペースが与えられた。当時のドイツやイタリアとの関係が影響したようである。

イタリアの展示会場は、立体的で動きのある彫刻作品が多く見栄えがしたため、日本の関係者の目には一際優れているように映った。それに比べて日本は小規模な絵画作品が多く、目立つ構図でもなかったことで、物足りなさを感じさせた。

だが、関係者の予想を裏切り、絵画部門で藤田隆治氏の「アイスホッケー（氷上ホッケー）」、水彩画部門で鈴木朱雀氏の「古典的競馬」が銅メダルを獲得し、音楽部門で江文也氏の「台湾の舞曲」、彫刻部門で長谷川義起氏の「横綱両構」が入賞する結果となった。

ロサンゼルス大会に続き、受賞作品は日本関係者の評価と異なっていた。このことから、芸術作品に対する評価は分がりづらく、国や人、時代背景によって判断が異なってくるものであると言えよう。芸術競技は1948（昭和23）年ロンドン大会まで続いた。

### 【人物紹介】

藤田隆治（日本画家）

ベルリン大会でのメダル獲得を機に、無名から一気に脚光を浴び活躍することになる。「アイスホッケー」は、ナチスに買い上げられ行方不明に。没後、彼に師事した笠青峰氏によって復元され、アトランタの博物館に展示された。

鈴木朱雀（日本画家）

ベルリン大会参加以前から、帝展（※）に何度も作品を出し入選した経歴を持つ『週刊朝日』や『キング』などの雑誌に挿絵も書いていた。

※帝展：帝国美術院の開催した展覧会。

1946（昭和21）年以降「日展」と改称。

## 日本の文化プログラム

日本の「文化プログラム」とは

- 多様な日本文化を通じて大会の開催に向けた機運を醸成する
  - 日本文化の魅力の世界に発信する
  - 地方創生、地域活性化につなげる
- これらの方針を踏まえて実施される文化イベントの総称。

参考：日本芸術文化振興会HP  
<https://www.ntj.jac.go.jp/topics/top/30/1749.html>

2020年を控え、日本もすでに文化プログラムが進行中である。その中で「東京キャラバン」、「TURN」という各プロジェクトと、中野区立図書館の展示について紹介する。

### 東京キャラバン

人と人が交わる場所に「文化」が生まれる。という概念のもと、劇作家・野田秀樹氏の発案によりスタートしたプロジェクト。2015（平成27）年から2017（平成29）年には、駒沢・リオデジャネイロ・仙台・相馬・京都・熊本などで、今年も豊田・高知で多種多様なアーティストがジャンルを超えてパフォーマンスを行った。2019年も秋田でのイベントが控えている。歌舞伎の動きをロボットで表

### 江文也（作曲家）

台湾生まれで1923（大正12）年に来日した。その後、日本コロムビアと契約しバリトン歌手として活躍する。声楽のみならず作曲でも才能を発揮し、コンクールで何度も入賞。ベルリン大会への出品につながった。

### 長谷川義起（彫刻家）

帝展やスペインの美術展で入賞しており、相撲をテーマとした作品を得意としていた。ベルリン大会では「横綱両構」が展示会場の一番目立つ場所に配置されるほど期待されていた。またロサンゼルス大会にも作品を出している。



### 芸術展示

芸術作品の客観的評価の難しさから、「芸術競技」は1952（昭和27）年へ

現する新旧文化の共演など、斬新なアイデアもあり、様々な企画で私たちの好奇心を刺激してくれるであろう。

### TURN（ターン）

「人がはじめから持っている力」に着目している美術家・日比野克彦氏監修のプロジェクト。

あるイベントでは、障害のある人や生きづらさを抱えた人たちと、アーティストが触れ合いながら生まれた作品が発表された。立場が異なる人々の「個」の出会いによって表現されるものを、目にすることができるともいえない。

### 東京150年事業 企画展示

国などが進める「明治150年」と関連した、東京都主催「東京150年事業」との連携展示。

「東京レトロさんぽ〜文明開化の音がする〜」と銘打ち、中野区立中央図書館で、東京の街並みを写真や図書館資料とともに振り返った。11月29日で終了。



▲企画展示の様子

## 日常生活も日本文化

和食が無形文化遺産に登録され、「Sushi（寿司）」「Tempura（天ぷら）」だけではなく、日本の食文化全体が注目を浴びている。

「Bento（弁当）」もその中の1つ。漫画やアニメの登場人物が、弁当を食べるシーンがきっかけでブームになり、海外の辞書に「Bento」と日本語の読みで載っている。一見派手ではない私たちの日常が、海外から評価され実は素晴らしいものであったことに気づかされる。

## 日本文化の未来

私たちが海外旅行をする時、その国々の文化に触れることは大きな楽しみである。日本を旅先に選ぶ海外の人たちも同じ思いに違いない。

日本には、歌舞伎や浮世絵などの伝統文化に加え、漫画、アニメなどの比較的新しい文化がある。古いものと新しいものを組み合わせることが得意なこの国で今後どのような文化が生まれ、受け継がれていくのか、未来がとても楽しみである。

## 文化プログラム

1992（平成4）年バルセロナ大会より、「芸術展示」は「文化プログラム」となった。この大会から、開催期間をスポーツ競技と同時期にせず、開催年を含む4年間にわたって、様々なイベントが行われることになる。

バルセロナでは、まず1988（昭和63）年から2年間、本番に向けた都市計画プロジェクトの展示が行われた。1990（平成2）年には、世界的な建築家が「バルセロナ・チェア」を制作したことにちなみ、バルセロナと結びついたデザインの日用品創作を、支援する活動が展開された。そして、開催年の1992（平成4）年には、演劇、ダンス、音楽、オペラ、バラエティやストリートショーなど、約700ものショーやパフォーマンスが行われた。

こうして競技から展示、イベントへと変わった文化部門だが、2012（平成24）年ロンドン大会では、「レガシー（遺産）」という概念のもと更に飛躍し、新しい文化プログラムが開発されていく。未来ヘレガシーを継承することを重要視して進められたプログラムは、若い世代の文化活動への参加が目標とされ、実施された。それは、開催地（ロンドン）のみならず、イギリス全土で行われる大規模なものであった。

### 【参考文献】

- ・『美術家人名辞典』 日外アソシエーツ／編 日外アソシエーツ 2009年 所蔵：中央
- ・『美術家人名辞典 建築・彫刻篇』 日外アソシエーツ／編 日外アソシエーツ 2011年 所蔵：中央
- ・『日本の作曲家』 細川周平／監修 日外アソシエーツ 2008年 所蔵：中央
- ・『「帝国」と美術』 五十殿利治／編 国書刊行会 2010年 所蔵：中央
- ・『まぼろしの五線譜』 井田敏／著 白水社 1999年 所蔵：中央
- ・「TOKYOO1/4と考える「コン」文化プログラム」 東京文化資源会議／編 勉誠出版 2016年 所蔵：中央

### 【参考WEBサイト】

- ・「2020年を見据えた文化」による「国」への目次文化庁HP  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/2020\\_bunkaprogram/2020\\_kunizukuri/](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/2020_bunkaprogram/2020_kunizukuri/)
- ・「東京150年事業」に関する研究および「地域版アートカウンシル」の提言」 大千義之 MUSEUM  
[http://www.murc.jp/thinkank/rc/quarterly/quarterly\\_detail/201502-03\\_153.pdf](http://www.murc.jp/thinkank/rc/quarterly/quarterly_detail/201502-03_153.pdf)
- ・アートカウンシル東京HP  
<https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/>
- ・「ハジメ人気」Beeroo  
田村有紀／文 朝日新聞デジタル 2013年2月6日  
[https://www.asahi.com/and\\_w/style/TKY201303050222.html](https://www.asahi.com/and_w/style/TKY201303050222.html)